

## 40 森鷗外のライプツヒにおける

### 衛生学研修

武 智 秀 夫

森鷗外のドイツ留学で最初の滞在地はライプツヒ。一八八四年一〇月二二日から翌年一〇月一日の間である。その間ホフマンの衛生学教室で研修した。私は文京区立鷗外記念図書館所蔵の留学時代ノートを詳細に調査し、独逸日記の記載と合わせて、ライプツヒでの衛生学研修を詮索したので報告する。

また一八八五年四月に日本で緒方正規が脚気菌を発見したとの発表にどのような意見を述べたか、さらに同年一〇月一〇日石黒軍医監に送った「日本兵食論大意」の内容にも検討を加え、鷗外のライプツヒ時代での衛生学の研修成果を考察したい。

ノートの内容を項目別にまとめると、(一)実験器具(天秤、ガラス器具、恒温箱、ガス炉、光度計など)の説明と図、

(二)尿の分析、測定、(三)脂肪、ブドウ糖、牛乳の脂肪、カフェイン、アルブミンの測定、日本米分析、日本茶のカフェイン測定、(四)水の分析、(五)気圧、温度、湿度、大気中二酸化炭素の測定、(六)細菌培養法、細菌の顕微鏡観察、(七)文献筆写になり、そのほか自身の体重測定記録(三カ所)、食事に関する記述(四カ所)がある。文献筆写によく現われるフリユツゲという記載は一八八一年版 *Lehrbuch der Hygienischen Untersuchungsmethoden* の部分であることが確認された。ノートの記載は一八八四年一〇月二七日が初めて、最後は翌年八月一日。これから衛生学教室での研修は一八八四年冬学期と翌年の夏学期であることがわかる。この期間からクリスマス休暇、ドレスデンでの負傷者運搬演習参加、ベルリン旅行を抜くと三七週になる。三七週中最後の九週を細菌実習に、二八週を化学的定量の実習に当てたと考えられる。

当時医学研究は観察のみでは不完全で、物理学や化学と同様に実験することで真の科学たりうるというクロード・ベルナルの考え方が大きいという。ドイツでもウェーバー兄弟、ヨハネス・ミュラーとその門下、

カール・ルードヴィヒなども同じ方向を歩んでいた。ホフマンの教室での研修を終えた時点で、鷗外は単に実験技術を修得したのみでなく、この時代のうねりを理解したであろうか。また当時漸く医学の一分野として認知され始めていた衛生学のアイデンティティーを受容したであろうか。

緒方の脚気菌発見について、発表一カ月半後の五月二三日つぎのような意見を日本に書き送っている。「脚気菌発見は一大事業」といいながらも「今まで軍医部で行ってきた脚気の統計は脚気に罹病する者の特有性に関することで、脚気が細菌でおこるとするのは一病の通有性に関することである。従って統計上の脚気取調べは十分有意義である。」という。余り科学的なコメントだとはいえず、脚気細菌説に賛同しているのかどうかもわからない。ライプツヒで書き上げた「日本兵食論大意」は初めの方で「米食ト脚気ノ関係有無ハ余敢テ説カズ」とことわった上でまとめている。この論文はすでに発表され一般的に信頼されている事柄を組み立て特殊な課題を説明する演繹の論理で書かれた総説である。論点をまとめる

と(一)日本海軍の西洋食採用への反論、(二)米食が西洋食におとらぬこと、(三)食糧の国内自給自足、(四)兵食の質と量の試算になる。そして米食に不安を抱くことはなく、兵食を経済的に可能な範囲で改善すればよいと結論している。この論文は石黒の賞讃をえている。鷗外がライプツヒを去るに当って「日本兵食論大意」を提出したモテイベーションについて考えると、留学一年の成果をスポンサーにはつきりした形で提示したかったのではあるまいか。多くの文学者はこの総説を完成させた演繹の手法を高く評価している。しかし科学的に眺めたとき、炭水化物、脂肪、蛋白質、無機塩類、水を五大栄養素とし、カロリーの概念もなく、二三二グラムの炭水化物と一〇〇グラムの脂肪を等価として蛋白と無窒素栄養質(脂肪換算)の比を根拠として、この時代の兵食の質と量とを具体的に示したことは評価されるべきであろう。私はこの「日本兵食論大意」をわが国の栄養学の貴重な歴史的資料の一つと考えたい。

(吉備高原医療リハビリテーションセンター)